The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	田中敦子と具体美術協会ー金山明および吉原治良との関わりを通して形成されたその作品の考察ー
Author(s)	加藤, 瑞穂
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/91773
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　加藤瑞穂　）	
論文題名	田中敦子と具体美術協会 ―金山明および吉原治良との関わりを通して形成されたその作品の考察―

論文内容の要旨

本稿では、田中敦子（1932～2005年）による作品の考察にあたって、田中の制作活動に大きく関わった二人の作家との関係に目を向ける。一人は、1951年頃に出会って以来、同じ作家として生涯にわたり田中に助言し、協力を惜しまなかった金山明（1924～2006年）、そしてもう一人は、田中が金山と共に1955年から約十年間会員として在籍した具体美術協会（略称：具体、1954～1972年）のリーダー・吉原治良（1905～1972年）である。田中作品の特質が形成されていく過程で、彼らが担った役割の解明を試み、田中と具体の研究において新たな視座を提起したい。

第1章では、今日までの具体および田中についての研究を概観し、その潮流とそこに残る課題について指摘する。第二次大戦後の日本の代表的前衛美術グループと見なされている具体とその主要メンバーの一人である田中については、1980年代から2010年代に至るまで国内外の公的機関で、複数回にわたって大規模な展覧会が開かれ、近現代美術を扱う論文や評論において頻繁に言及されてきた。しかしいずれの場合でも、グループ内の複数の作家同士がどのような関係を築いていたのか、あるいは彼らの作品は果たしてすべて一様であったのか、違っていたのであればそれはどこかといった、グループの内実については検討されておらず、メンバー間の関係性を問う視点はこれまで取られたことがなかった。

その課題を念頭に置き、第2章より田中作品の分析を行うが、最初に田中の代表作の一つでもっとも知られた、多数の電球から成る《電気服》を取り上げ、本作が持つ意味を考える。続いて本作に関連した作品群を順に検討し、平面作品への展開を論じる。1992年に《電気服》について詳しく考察したフランソワーズ・ルヴァイアンが指摘しているように、「具体美術宣言」（1956年）を初めとした吉原の物質論だけでは《電気服》の特性は分析し難い。そこで筆者は、本作が「衣服」の形態を取っていることを元に、現象学的な視点を援用して本作の解釈を試みる。本作の中心を成すのは、電球が点滅した結果現れる個々のイメージではなく、次々に移り変わってゆくという「変化」それ自体であり、しかもその変化に規則性がなく、さらにその変化には身体が介在している点である。関連作品や資料の検討を通して、田中が着目したのは、刻々と変換・移行してゆく身体の可視的表面であったと考えられる。《電気服》以前の作品を検討しても、主にコラージュの採用により二つの異質なものが接する境界への関心、そして既存の規則を破って全体の構造を組み替えていく力への関心が読み取れ、そこに身体的要素が結びつくことで、《電気服》へと展開する過程が跡付けられる。

その後制作活動の中心となった平面作品においても同様の関心を見出すことができ、第3章では主にその平面作品に着目して、田中が求めた「絵」とは何かについて考察する。田中が語る「絵」の概念の特異性を最も端的に示すのが、二十個のベルが1メートル間隔で繋がり、スイッチを押すと順に鳴り響く《作品》（1955年）で、田中は本作をも「絵」と呼ぶ。その制作を通して田中は、鑑賞者のうちに引き起こす意識、しかも一人一人の個別で具体的な身体と結びついた「いまここ」の意識を問題にし、身体との関わりで視覚を捉える志向を明確化していった。そして、鑑賞者一人一人が作品を見る度に、各自の中で運動が起こり空間が立ち上がるような感覚を沸き起こす、身体感覚を覚醒するものとしての「絵」という概念が、1960年代にかけて形成されたと推察される。実際に《電気服》以後1960年代の「絵」を検討すれば、それらは《電気服》における分かち難い三つの要素、「形態と色彩の絶え間ない構造変換」、「身体」、「電気エネルギー」を、平面上にいかに再構築するかという課題に一歩一歩取り組んだ軌跡と呼びうる。

続く第4章では、田中が作家活動を開始した1954年頃から常に身近にいた金山の作品に注目し、特に1950年代半ばの作品の推移を追う中で、「『具体』のなかの異邦人」と言われたその特質を探る。具体の典型とされる荒々しい筆致や分厚いマチエールとは無縁の作品を手がけた金山は、空間表現に関心を向けながらも、西洋絵画におけるそれとは別種の空間を意識し、試行錯誤を重ねた。とりわけ1950年代半ばは、船荷証券のコラージュを採用し、印字された文字の粗密によって形態を浮かび上がらせる作品群を経て、最終的には画面の縁に数本の線のみを引くスタイルへと至る。それは、作品内で成立する自律的なイリュージョンとしての空間ではなく、作品と現実との関係に支えられる空間の有り様に関心を払った成果とみなせる。

第5章では、金山がその後1957年より取り組んだ、自らの身体を激しく動かす代わりに電動の機器を操作して描く手法について、幼馴染で0会を共に立ち上げ、しかも同時に具体に加入した白髪一雄との比較を通して、それがどのような意義を持つのかを考察する。この描画方法は、1956年の《足跡》やバルーン状の作品からの経緯を踏まえると、白髪の足による描画との対照性を金山が意識し、編み出した可能性が高い。それは、いわゆるアクション・ペインティングを意図的に踏まえながらも、その前提となっていた創造主としての作者を絶対視する見方を相対化した。しかも金山が関心を持っていた宇宙、言い換えれば物理的法則に基づくその時間的推移と空間的広がりを表象する一つの手立てとして採用されたと目される。

前章までの考察を受けて第6章では、田中と金山それぞれの作品を比較し、中でも1954-55年における両者の密接な関係を明らかにしながら、その共通点と相違点を析出する。浮かび上がったのは、金山がいたからこそ田中は当時の制作の糸口を見出すことができた点、ただし田中は単に金山の制作をなぞるのではなく、船荷証券のコラージュ等、共通する素材や手法を取り入れながらも、金山とは別の志向を明瞭化した点、具体的には、田中は金山よりも素材となる物質の特性をより大きく生かし、身体の感覚に訴える要素をより強く打ち出した点である。そして1957年には二人は、共通点を保持しながらも、特に電気の扱い方で相違を顕在化させた。

第7章以降は、田中や金山の1950年代後半の作品をより広い文脈で見直すために、当時の美術界でもっとも大きな影響力を持ち、具体自体もその一翼を担うと位置づけられたアンフォルメルと呼ばれる動向の日本での受容を顧みる。アンフォルメルは1956年にその作品と概念が日本でまとまって紹介され、翌年に主唱者のミシェル・タピエが来日し積極的に発言したことで、美術界に旋風を巻き起こした。ただ、日本でのアンフォルメル理解はタピエ自身の主張とは異なっていた点が見逃せない。例えば、タピエはアカデミズムの単なる否定に終わらず、古典主義に代わるいっそう精密な美学ないし形態学の構築を目指していた。しかし日本ではその点への理解がほとんど欠落しており、逆に生命の躍動感を強調するなど、美学や秩序を否定するかのような言説が支配的であった。その後1958年にはアンフォルメルは否定的に捉えられ始め、タピエから高く評価された具体もまた批判されるようになる。以上の文脈をふまえ吉原が1956年に発表した「具体美術宣言」に改めて注目すると、そこにはアンフォルメル受容の初期段階に見られた解釈の揺らぎが随所に読み取れると同時に、吉原が同時代の先鋭な美術をどれほど早く、しかも貪欲に学び取ろうとしたかが判明する。

第8章では、前章で取り上げた「具体美術宣言」へとつながっていく「物質」観および「具体」観について、戦前の1930年代にまで遡る歴史的経緯と、吉原の思考の軌跡を検討する。近年の戦後美術史研究の蓄積によって改めて浮彫りになったように、「物質」を問題としたのは、実は具体だけではなかった。むしろ1954年結成の具体に先駆けて、美術のあり方を模索していた瀧口修造や花田清輝ら先進的な批評家や作家たちの間で「物質」はすでに重要な概念となっており、その主要な論拠になったのが1930年代のシュルレアリスム解釈であった。吉原の1930年代半ばの作品および旧蔵書籍を精査すると、吉原が特にジャン・アルプの作品を参照し制作に生かしたこと、その判断は、当時交流のあった美術家・評論家の長谷川三郎の志向に準拠していたことが導き出せる。ただし吉原はアルプと違って、カメラ等の機械を媒体にして、そこに主観を超えたイメージを発見していく手法を積極的に取った点に特徴がある。こうした客観主義、作者個人の主観を拠り所にすることへの懐疑が、吉原を「物質」へと向かわせ続け、花田らの目指した新しいリアリズムとは一線を画した、「具体」形成の核になったのではないかと考えられる。

最後に第9章では、田中、金山、吉原が築いた関係を検討するために、まず吉原の田中に対する批評が田中の評価にどのような影響を与えたのかを顧みる。その後、田中の作品をいち早く認めた吉原の元を、田中が1965年金山と共に去ることになった経緯に関して、1960年代半ばの吉原の状況をふまえながら解明すると共に、その理由を推察する。田中が具体に在籍した1955年から1965年の間になされた田中作品の批評を概観すれば、吉原が果たした役割は功罪相半ばとはいえ重大で、両者は決して切り離すことができない関係にあったことが分かる。田中自身、そして田中に協力していた金山も、具体加入後少なくとも1958年頃までは、吉原の感性の鋭敏さや指導力の高さに感銘を受け、その言動に鼓舞されて制作を進めていったのは事実である。しかし1960年代前半になると、感情面での軋轢が強まったことに加え、吉原が1960年代半ば、海外の状況に鑑みグループ全体の方向性を一新し、新機軸を打ち出す必要性に迫られた。その結果、結成当初に見られた、物質や身体を再考し新たな美術概念の規定を試みる自由度の高いプラットフォームが硬直化し、各作家の判断や着想の多様性を許容することが難しくなったと考えられる。言い換えればそのプラットフォームは、当初から典型的とは言い難い田中・金山を留め置くだけの柔軟性をもはや持ち得なくなったのである。本研究をさらに進展させるには、金山、吉原にとどまらない他のメンバーと田中との関係や、田中以外のメンバー同士の関係へと視野を広げていき、より精緻に関係の網の目を読み解いていくことが必要となるだろう。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　加藤瑞穂　）	
論文審査担当者	（職）　氏　名 主 査　大阪大学　教授　圀府寺 司 副 査　大阪大学　教授　橋爪節也 副 査　大阪大学　教授　岡田裕成 副 査　鳥取県立博物館副館長　尾崎信一郎 副 査　京都市立芸術大学名誉教授　井上明彦

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　田中敦子と具体美術協会
—金山明および吉原治良との関わりを通して形成されたその作品の考察—

学位申請者　加藤瑞穂

論文審査担当者

主査 大阪大学教授　圀府寺 司
副査 大阪大学教授　橋爪節也
副査 大阪大学教授　岡田裕成
副査 鳥取県立博物館副館長　尾崎信一郎
副査 京都市立芸術大学名誉教授　井上明彦

【論文内容の要旨】

本論文は具体美術協会の主要作家のひとりとされる田中敦子とその作品を、具体のリーダー吉原治良と、後に夫となった金山明との芸術的、人間的関係に着目し、彼らとの関係の中で田中の作品を考察したものである。これまでの国内外の田中敦子研究は田中作品のみを論じたものがほとんどであったが、本論文は田中と吉原、金山との関係から田中の特質を浮き彫りにしようとするものである。

まず第１章において具体並びに田中に関する先行研究を詳細に精査し、「第２章　《電気服》から見た田中作品」においては田中の代表作の一つ《電気服》についての詳細な分析を行うとともに、《カレンダー》、《作品》(ベル)にも言及した。「第３章　田中の〈絵〉」では《作品》(ベル)について詳細に論じるとともに、田中自身がコードで繋がれたベルが次々に鳴っていくこの作品をなぜ「絵」という語で呼んだかについて考察している。また、この田中独特の「絵」の概念を敷衍し《電気服》ならびに《電気服》を平面化した作品群の特質を「身体」の問題と絡めて論じている。「第４章　金山作品の特質」「第５章　金山の電動機器による描画の誕生 -- 白髪一雄との対照性」では、金山作品を初期の 0 会時代から詳細に論じ、金山のその後の展開を、幼なじみながら対照的な芸術的個性をもった白髪一雄との関わりと対比によって分析している。「第 6 章　田中の 1950 年代半ば – 具体加入時期における金山との関わり--」では、田中の作品を金山ならびに金山作品との関わりにおいて論じ、「第 7 章　アンフォルメルと吉原」「第８章　吉原の「物質」をめぐる思考と「具体」概念の形成」においては吉原の活動、思想を同時代のフランスの運動アンフォルメル、同時代の批評空間との関わりの中で論じ、「物質」、「具体」などの概念の意味を、それらが生まれてきたコンテクストの中でより明確なものにした。最後の「第９章　田中、金山、吉原の関係」においては、これまで論じてきた各章の議論を踏まえ、田中、吉原、金山の関係をより深く論じ、田中と金山が具体美術協会を脱会するまでの経緯を論じている。田中の作品に対する高い国際的評価、それに対する吉

原の反応をとりあげ、さらにアムステルダム市立美術館における Nul 国際展への参加など、諸外国の新しい芸術傾向に触れることで吉原が具体の方針転換を図るに至ったこと、それによって田中と金山が具体に留まることが困難になり、具体を脱会した経緯が論じられている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の著者は芦屋市立美術博物館の学芸員時代から同館所蔵の具体作品、ならびに同館に委託されていた具体アーカイブを研究し、具体関連の展覧会や出版物にも関わってきた。同館が指定管理者制度に移行した際、委託されていたアーカイブなどとともに大阪大学総合博物館の招へい教員として移動し、本学においても具体アーカイブの管理ならびに研究を続けた。この具体アーカイブは日本の複数の美術館が強い関心を寄せていたもので、外国に流出する可能性もあった第一級のアーカイブであり、大阪大学でしばらく保管した後、現在の中之島美術館が管理することになった。著者はまた、田中敦子、金山明をはじめ具体の元メンバーにもインタビューを重ねており、作家たちの生の声を記録し、伝えることのできる数少ない研究者の一人である。

本論文は一次資料としてのアーカイブを熟知し、作家たちとも交流を重ねた著者でなければ書けない、貴重な一次情報に満ちた論文であり、また、田中敦子ひとりについての論考ではなく田中を他の具体メンバーたちとの関係において捉えるという点でも独創的なものである。これまでの国内外での具体研究においては個別の作家論が中心で、作家間の関係を詳細に論じた研究はなく、本論文の論文審査委員からもこのようなアプローチは具体研究、美術研究において将来への展望を感じさせるものだとして高く評価された。作品の分析はきわめて精緻で、たとえば布を使った作品についての詳細な分析、《カレンダー》の制作プロセスについての考察、合成樹脂エナメル塗料による作品に関する論考なども、美術館で作品に直接触れてきた著者ならではの物質性を意識したものであり、充分な説得力を備えている。

あえて問題点をあげるとすれば、第 7 章の「アンフォルメルと吉原」が全体的な構成の中での論理的整合性に若干の問題を感じさせたが、全体としての研究成果の価値を減じるものでは決してなく、今後著者自身あるいは次世代の国内外の研究者たちによって発展させる可能性を孕んだ問題提起も豊富に盛り込まれた秀逸な論文である。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。